

連載 “Well-being”ことはじめ

第 85 回 受難、祈りの音楽

臨床心理士・公認心理師・カウンセラ

三村 和子

昨年のメルマガ 7 月号と 11 月号において、コロナ後に管理職が直面するストレスについて触れました。ハラスメントの認識の高まりから、部下の指導の際に必要な以上に気遣いをしなければならないと負担に感じている人が増えていること、マネジメント業務に加えてプレイング業務が一定程度あること、そして更に上層部からのプレッシャーがかかるというストレスフルな状態となっています。これはまさに「管理職受難」の時代といいでしょう。

「受難」という言葉からバッハの「受難曲」が思い浮かびます。有名な「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」の 2 つがありますが、これらは新約聖書の「マタイによる福音書」「ヨハネによる福音書」を元にした壮大な宗教曲です。バッハの創作からおおよそ 400 年が経過した今でも世界中の多くの人々に感動を与える創作を行ったバッハの人生とはどのようなものだったのでしょうか。

音楽に対する情熱や、創造性、勤勉さ、そして困難に立ち向かう姿勢などから、現代の「受難」を乗り越えるための普遍的な何かを探ることができるかもしれません。バッハが生きた時代は 18 世紀であり、文化や社会的な影響を考えると、日本の現代社会にそのまま適用するのは難しいかもしれません。今月は創造性に溢れるバッハの音楽や人生が私達に訴えかけるメッセージに耳を傾け、作曲家バッハについて検討します。

ヨハン・セバスチャン・バッハの人生について、音楽学者の樋口隆一氏によれば、この時代の音楽家は自由業ではなく、原則として宮廷に仕えるか、都市の教会に勤める音楽師（今でいうと公務員のような職業）の二択でした。樋口氏の著書「バッハ探求」「バッハの風景」と併せ、バッハの生涯や生活ぶりについて、ひのまどか氏が記した「バッハ：忘れられていた巨人」を参考に以下に記します。

バッハ一族は音楽家系でバッハの父も音楽師でした。幼少期から困難が始まります。バッハは 10 歳までに両親を亡くし、オルガン演奏家の兄に引き取られます。それから 5 年間は兄に養われ生活面での心配はなかったようですが、兄に家族ができると兄の家を出ることを求められます。

15 歳のバッハは、「生活の基盤を持たず、音楽の才能がある男子」に開かれていた進路であった教会の給費生となります。給費生となれば、生活費は一切教会が面倒をみってくれるため、ラテン語などの勉強や教会の音楽活動の奉仕をします。当時からヨーロッパは町中が音楽に溢れている環境であり、バッハも教会合唱隊のボーイソプラノとして街角で唄うアルバイトをしていました。

その後、オルガンや他の楽器演奏にも長けていたバッハは、教会オルガニスト、宮廷オルガニストを経て宮廷楽長に抜擢されます。宮廷楽長として働いていた頃は経済的、生活環境にも恵まれ、最も華やかな人生でした。その後宮廷楽団の予算縮小などの問題から転職を試みます。

※当時の音楽師のキャリアルートとしては、以下でした。

教会オルガニスト→教会音楽師



宮廷オルガニスト→宮廷楽長

ライプツィヒ市の音楽師に応募して採用されたバッハには、大きく 3 つの役割を果たすことが求められました。

1) 市の中心にある聖トマス教会の教会音楽師

- ・音楽監督
- ・作曲と上演（教会オルガニストは他にいたにもかかわらず、バッハは自分で演奏した。）
- ・教会合唱団の指導

2) 教会学校の教師

- ・ラテン語と教理の授業を担当
- ・生徒達の監督（寄宿舎の夜回りなど含む）

3) 市の行事の音楽監督

- ・他の都市から来訪する地位の高い人を歓迎する行事のための作曲と指揮
- ・結婚式や葬儀のための作曲と指揮

このような兼務は当時一般的だったそうですが、バッハのライプツィヒ市での仕事量は多くて過酷でした。中でも教会音楽師としての作曲は、毎週新曲を出さなければならなかったことが、最も負荷が高い仕事だったでしょう。具体的には、毎週日曜の礼拝に新しいカンタータ（礼拝や宗教行事で演奏される器楽演奏と合唱曲）を上演するため、月火は作曲、水木には家族と弟子を動員してパート譜の作成、金土は練習という週次スケジュールをこなしていました。

20 人の子（当時の医療・衛生事情から、およそ半数は幼少期に死亡）の親であり、家に帰れば子ども達の教育にも時間を割いていたとあります。加えて孤児であったために大学卒の学歴のないバッハは、教会を監督する市の参事会から優遇されず、しばしば対立していたようです。激務の上に上層部からは評価されない、それでも毎週カンタータの新曲を創り、演奏しなければならないという、困難続きの生活であったことが想像できます。驚くことにライプツィヒ市の最初の 5 年間でバッハは 300 曲もの新曲を創作しました。

バッハの人生をキャリア面で振り返ると、宮廷楽長としての生活は恵まれたものでした。領主レオパルト公の求めに応じて音楽を創作し、17 名の楽団員と演奏することが仕事でしたので、自由を満喫しながら音楽の才能を発揮できました。しかし、宮廷の音楽予算の縮小、そして宮廷にいたままでは子どもが高等教育を受ける機会が得られないなど、様々な理由から転職を決意します。これは、現代でたとえるならば自分を最良してくれるオーナー企業の高度専門職から地方公務員への転職でしょうか。

バッハの音楽はゆったりとした旋律と和声が特徴ですが、弟子が記した伝記によれば、バッハは自由な精神で作曲することを弟子たちに奨励し、技術的な厳密さを高度に成立させていたといえます。そして、視力を失う前年、集大成となる「マタイ受難曲」を創作・上演しました。「マタイ受難曲」は「音による宗教画」と評されています。樋口氏は「マタイ受難曲」が、バッハ自身の信仰告白にあたるのではないかという解釈を以下のように示しています。

バッハは受難の物語を客観的に叙述する立場を超えて、一人の人間としてユダの裏切りを憤り、ペテロとともに泣き、バラバと叫ぶ大衆の節操のなさに憤慨します。(中略) バッハの場合、そこにもうひとつの視点が加わっているのです。銀貨三十枚で師のイエスを売ってしまうユダ、保身のためにイエスの弟子であることを三度も否定するペテロ、そして一度は歓呼してエルサレムに迎えながら、いとも簡単に立場を変え、イエスの死刑を要求する群衆も、他人ごとではなく、考えてみれば自分のなかにもそうした面があるのではないか。つまりそうしたあらゆる人間の弱さに対しても、はっきりと目を見据えている強さと愛情。そのような彼の人間臭さが、《マタイ受難曲》を聴いたときに、こう考えざるを得ないのです。

つまり、人間は弱いものであり、いつユダになるか、ペテロになるか、罪のない救い主の死刑を求める群衆の一人になるかもしれない、そうした危うさをバッハは自分の中に認め、苦しみの中にあって神に祈り、音楽を捧げていたのでしょう。

イエス・キリストの受難は、キリスト教徒でない人でも多くの人の心を動かし、生きる苦しみや人間の残酷さ、心の弱さなどに直面させられるエピソードです。教会音楽の中で受難をとことん味わったバッハは「自分の弱さ」を認めて自戒すると同時に、希望と再生の象徴をみていた、つまりポジティブに生きるためのモデルとして深く刻んでいたのではないかと思います。

コロナ後の働く人の環境に話を移します。コロナ後のカウンセリングでは、若手から「〇さんのようになりたい」といった上司や先輩を自分のロールモデルとして挙げる話を聞

くことが少なくなりました。これはテレワーク導入などにより、一緒に働く習慣が減り、対面で指導を受ける機会が減ったことが影響していると思います。自律や成長のモデルとなる人物のイメージが心の基礎として根付いていないことに、心理的支援に携わる者として強い危機感を持っています。

IS 技術者が自らの専門分野において崇高さを求めて創造性を発揮すること、そして崇高さを求める過程で内面にどのようなイメージを抱くかはモチベーションとパフォーマンスに長期的に影響すると思います。

ネット社会になり、変化のスピードは加速しています。仕事上の会話でも、常に即答や即結果を求めることに終始するのではなく、重要なことならについては熟考を重ねた議論が必要です。IS 産業で働く人達には、何のための IS か、目標を掲げて新しい IS を適用することによる価値の創出について議論をすることが重要です。今取り組もうとしている仕事は、社会にどのように役に立つのかについて根本的な議論をすることについて、IS 構築の全工程を通じて対話していただきたいと思います。

IS 技術者の方々がやりがいを持って働くことができるよう、そして組織がよい方向に向かうために何がよいのかについて、本稿では今後も探って参ります。皆様からのご指摘やご意見をお待ちしています。

<参考・引用>

- *1) 樋口隆一，バッハ探求 春秋社，1993
- *2) 樋口隆一，バッハの風景 小学館，2008
- *3) ひのまどか，バッハ：忘れられていた巨人 リブリオ出版，1990